

八女市文化財調査報告書第9集

# 城の谷遺跡

——八女市大字北田形所在の古墳と経塚の調査——

1983

八女市教育委員会

# 城の谷遺跡

1983

八女市教育委員会



I. 城の谷古墳出土変形神人鏡



2. 城の谷経塚出土経筒

# 序

八女市の北部に連なる丘陵地帯は、一大古墳群を形成し、古代九州の要地として重要なはたらきをしてきました。その中心をなすのが岩戸山古墳ですが、そこから東へ約4kmの地点に、秦の始皇帝にまつわる童男山古墳があります。その古墳の南側を東から西へ蛇行する星野川の対岸に北田形古墳群があります。

昭和54年1月、その古墳群の一角に地元の信仰厚い方々によって社が築かれることになり、開基が行われた際、古墳をはじめ、貴重な経簡などが発見されました。

八女市教育委員会では、早速福岡県教育委員会文化課のご協力を得て調査を実施し、北田形古墳群の状況をさらに詳しく知ることができました。ご多忙にもかかわらず調査の指導にあたられた福岡県教育委員会文化課に対して深く感謝の意を捧げます。

なお、本調査報告書の発刊にあたり、調査及び原稿の執筆を担当された福岡県教育委員会文化課宮小路賀宏・新原正典氏をはじめ関係各位のご協力に対し衷心より敬意を表します。

昭和58年4月30日

八女市教育委員会

教育長 坂 田 不 二 夫

## 例　　言

1. 本書は、福岡県八女市大字北田形字城の谷に所在する古墳及び経塚の発掘調査報告である。
2. 本書の執筆分担は次の通りである。

I	新原正典
II	"
III-1	"
1-(4)のうち玉類の項	平島文博
2	宮小路賀宏

3. 本書の編集は、宮小路の助言を得て新原が担当した。

## 本　文　目　次

I	調査の経過	1
II	位置と環境	3
III	調査の内容	4
1	城の谷古墳の調査	4
(1)	墳丘	4
(2)	内部主体	4
(3)	遺物出土状態	6
(4)	出土遺物	8
(5)	小結	15
①	古墳の立地と内部主体について	15
②	粘土枕について	17
③	変形神人鏡について	20
④	副葬土師器と年代について	22
⑤	複数埋葬と被葬者の性格について	23
2	城の谷経塚の調査	27

## 挿 図 目 次

Fig. 1	城の谷遺跡周辺の古墳	2
Fig. 2	城の谷古墳主体部箱式石棺実測図	5
Fig. 3	遺物出土状態実測図	6
Fig. 4	変形神人鏡拓影	8
Fig. 5	土師器壺実測図	9
Fig. 6	土師器壺付着布目压痕	9
Fig. 7	鉄器実測図	10
Fig. 8	鉄鋤付着布目压痕	10
Fig. 9	玉類 実測図	11
Fig. 10	管玉計測値分布図	15
Fig. 11	経筒 実測図	27
Fig. 12	求菩提山経塚出土経筒	28

## 表 目 次

Tab. 1	勾玉計測表（平島作成）	13
Tab. 2	管玉計測表（平島作成）	13
Tab. 3	算盤玉計測表（平島作成）	14
Tab. 4	ガラス小玉計測表（平島作成）	14

## 図 版 目 次

	本文封面頁
PL. 1 - 1 古墳遠景（南から）.....	4
2 石棺露出状態（南から）.....	4
2 - 1 石棺蓋石（東から）.....	4
2 石棺内部 2号人骨（東から）.....	4
3 - 1 石棺蓋石除去後（南から）.....	4
2 石棺側板工具痕（南から）.....	4
4 - 1 1号人骨、鏡出土状態（西から）.....	7
2 粘土枕、装身具出土状態（西から）.....	7
5 - 1 棺外副葬土師器壺出土状態（東から）.....	7
2 棺外副葬鉄鋌出土状態（西から）.....	7
6 - 1 変形神人鏡.....	8
2 変形神人鏡（拡大）.....	8
7 - 1 土 師 器 壺.....	9
2 鉄 鋌.....	10
3 鉄 刀 子.....	10
4 頭部右脇出土玉類.....	12
5 頭部左脇出土玉類.....	12
8 - 1 城の谷経塚出土経筒.....	27
2 求菩提山経塚出土経筒（行賀銘）.....	29
3 求菩提山経塚出土経筒（隆壁銘）.....	29
4 求菩提山経塚出土経筒（巖尊銘）.....	29

# I 調査の経過

昭和54年1月末、八女市教育委員会より県文化課へ、八女市大字北田形の山頂にて、社殿建立のためブルドーザーによる整地作業中に古墳を破壊し、石棺と経筒が出土した旨の連絡があった。1月29日、県文化課職員が現地へ到着した時には、古墳の墳丘は既に削平されてしまつておらず、古墳の主体部である箱式石棺だけが丸裸に露出された状態であった。一緒に出土したという経筒は、墳丘削平中に発見されたらしく、既に取り上げられていた。

一方、工事施行業者は社殿の建立を急ぐためすぐにでも石棺をも壊すとの強行策であったが、八女市教育委員会の懇意なる説得により、ようやく2日間だけの猶予期間が得られ、主体部箱式石棺のみの調査を行った。

なお、この古墳はすでにその所在が知られていた古墳で、それによると柳島第9号墳（遺跡番号八女市110023）に該当するが、古墳の所在地は大字柳島ではなく大字北田形字城の谷であるため、字名をとって城の谷古墳と呼称することとした。

調査期間および調査関係者は下記の通りである。

所在地 福岡県八女市大字北田形字城の谷1046

調査期間 昭和54年1月30・31日

庶務担当

八女市教育委員会	教育長	今 村 久 信
"	社会教育課課長	小 島 升
"	" 係長	平 島 敏 章
"	" 事務吏員	山 口 龍 一
"	" "	鹿 野 耕 一
"	" "	伊 藤 周 二
"	" "	井 上 浩 子

調査担当

福岡県教育庁管理部文化課調査第一係係長 宮小路 賀 宏

" 技師 新 原 正 典

福岡県文化財保護指導委員 木 附 光 雄

なお、出土遺物の整理・復原は岩瀬正信氏指導のもとに九州歴史資料館にて行い、遺物の実測には文化課の川述昭人・見玉真一技師、および中野恵子補助員の協力を得た。また、遺物写真は九州歴史資料館の石丸洋技師撮影によるものであることを付記しておく。

註1.『福岡県遺跡等分布地図(八女・八女郡編)』福岡県教育委員会 1980

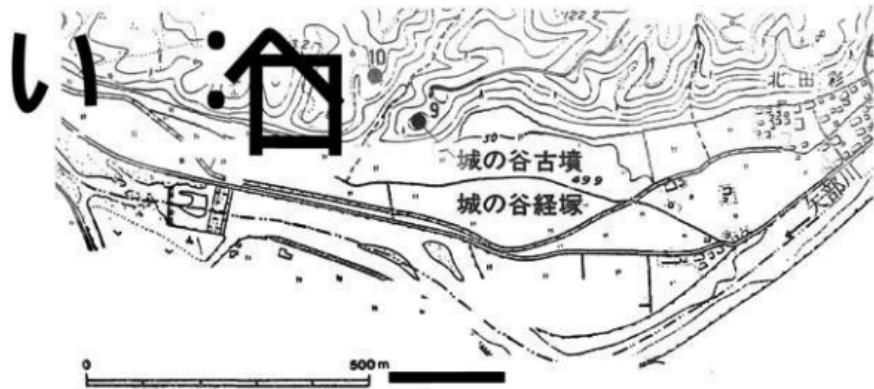
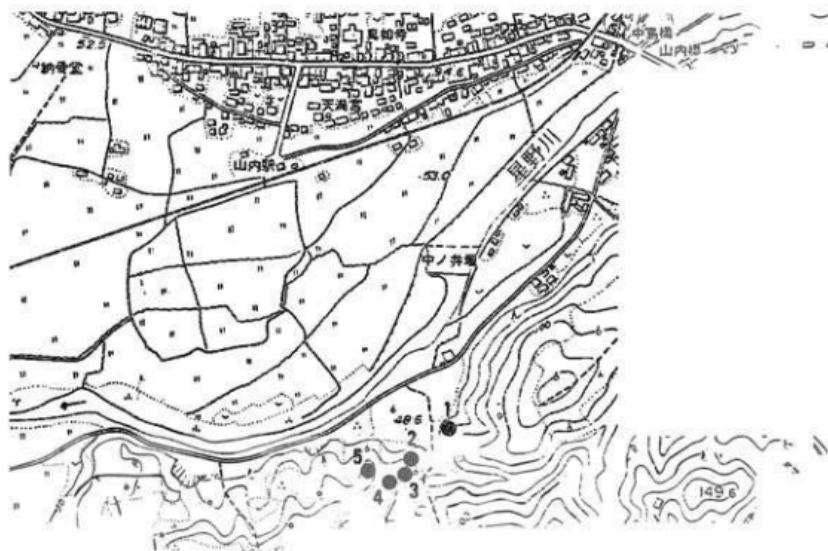


Fig. 1 城の谷遺跡周辺の古墳 (1/10,000)

## II 位置と環境

城の谷遺跡が所在する八女市は、福岡県南部のほぼ中央部に位置し、市域の北東は耳納山地南面の丘陵地で、他の大部分は有明海へと注ぐ矢部川がつくる扇状地である。矢部川は八女市東部の糸迦ヶ岳山に源を発して西流し、八女市祈祷院にて矢部川の支流星野川と合流する。この両河川に挟まれて丘陵が西から東へと延びているが、遺跡は合流地点より約2km上流の丘陵最西端部に位置する。遺跡はその丘陵の南面、標高96mの山頂部にあり、南眼下には西流する矢部川を見下す。付近の水田との比高差は46mほどを測る。

以上のように、城の谷遺跡は八女平野の付根部に位置し、地形的にも位置的にも絶好の場所に選ばれている。八女市といえば、岩戸山古墳に代表されるが、岩戸山古墳等多数の前方後円墳や古墳が点在する八女丘陵は、当遺跡より4~5km北西の方向に延びている。また、1981、82年に調査された立山山古墳群とは、星野川がつくる谷間を隔てた北西約2.5kmの位置に対置するが、展望はきかない。

岩戸山古墳を中心とした八女地方の古墳時代については、これまでに多くの人々により触れており、ここでは多言を要しない。ただ、平野部の最奥地に位置する当丘陵には八女丘陵にみられるような前方後円墳は所在せず、星野川に面する北面丘陵に柳島古墳群や帰路女喜古墳群が、また当遺跡より東に所在する北田形古墳群などの群集墳が営まれているに過ぎない。また、眼下の矢部川を挟んで南の立花町には、浦田横穴や後田横穴のように多数の横穴群が群集しているだけで、前述の八女丘陵にみられる古墳群のあり方とは対照的な違いを示している。

また、後章で述べられているように、城の谷経塚出土の経筒は、豊前求菩提山との関連性が指摘されている。時代はずっと古くなるが、岩戸山古墳の主筑紫君磐井は大和朝廷との争いに破れた後、一人豊前上膳県の南の山に遁れたと伝えられている。この南の山は求菩提山あるいは犬ヶ岳に比定されており、このことからも古代から両地域に交流があったことが窺われる。

なお、当古墳の北西はすぐに大字柳島であるが、江戸時代に編集された矢野一貞の『筑後国史 筑後將士軍談』によると、柳島村城跡として「村東ノ山中ニアリ、城ノ峰ト云、城主詳ナラタ」とあり、当古墳の所在する城の谷とは何らかの関連があるのかもしれない。

註1. これらのものには下記のものなどがある。

森貞次郎『岩戸山古墳』 中央公論美術出版 昭和45年

佐田 茂『筑後における古墳の動向』『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』昭和55年

『八女古墳群分布調査報告(1)』『筑後考古』7 筑後考古学研究会 1978

『八女古墳群分布調査報告(2)』『筑後考古』8 筑後考古学研究会 1979

註2. 『風土記』『日本古典文学大系』2 岩波書店 昭和33年

### III 調査の内容

#### 1 城の谷古墳の調査

##### (1) 墳丘

城の谷古墳は矢部川を眼下に見下す標高96mの丘陵山頂部にあり、狹小な谷を挟んで北100mほどの地点にも半壊した円墳の柳島10号墳が対峙して所在している。前述したように、古墳の墳丘は調査前に重機により削平されてしまつて本来の形状ははっきりしないが、工事関係者の話によると、以前は土鏡頭状に盛り上がっていたとの事であるので、墳丘をもつた円墳であったことが窺われる。墳丘の削平は地山面まで行われていたが、周溝等の遺構も存在せず、墳丘径もわからない。ただ、参考となるのは先の柳島10号墳も当古墳と同様に山頂に独立して築かれており、半壊はしているが径16×10m、高さ2mの円墳であることから、当古墳もそれに順じた大きさを考えることができよう。

また、工事中に墳丘西側の方より、木炭とともに経簡が1本発見されているが、他には何らの遺物も出土していないとの事である。

##### (2) 内部主体

工事により古墳の主体部である石棺の上半部は既に露出され、東蓋石も動かされていたが、原形はほぼ保たれていた。主体部は切石の板石を6枚組み合せた箱式石棺である。

箱式石棺は、地山に掘り込んだ長さ2.4m、幅0.8m、深さ0.55mの長方形プランを呈する狭い墓壙内に構築され、墓壙壁と側板との間は粘土で充填した個所もある。石棺の主軸方位はN-72°-Eをとり、ほぼ東頭位である。石棺内法は底面で主軸長1.72m、幅は粘土枕のある東小口で0.49m、西小口で0.44m、高さは0.32mを測り、通有見られる石棺である。棺身の組み合せ方は、両側板に小口板が挟まれ、両側板は小口板より長くはみ出るもので、両側板は各々2枚の、小口板は各1枚の計6枚の厚い切石を使って構築している。蓋石は長方形の板石2枚を構架しているが、粘土等による目張りはみられなかった。

石棺に使用されている石材は、全て黒っぽい地肌の凝灰岩で、側板の内面には板壁整形の際の工具痕が明瞭に残されている(PL. 3-2参照)。また、棺内四壁全面と蓋石内面には丹が塗布されており、真紅色を呈していた。棺底面は、墓壙底より25cmほど上にて灰色粘土を約2cmの厚さで全面に張り、さらにその上に玉砂利を敷き詰めて棺底としているが、西側足位の方へやや傾斜している。東小口側には、長径31cm、短径30cmの平面馬蹄形をなし、中央部から頸部にかけては凹ませ、高さ11cmの高線をつけた立派な粘土枕を付設している。

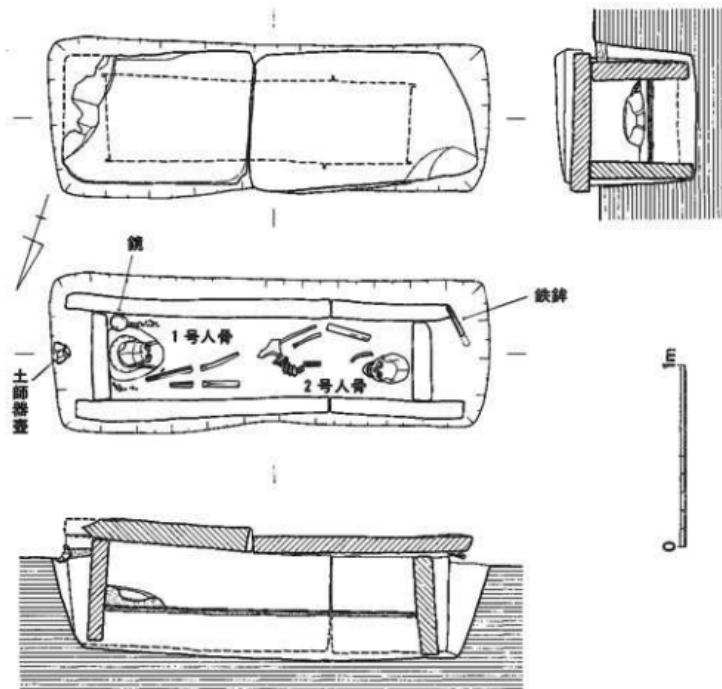


Fig. 2 城の谷古墳主体部箱式石棺実測図 (1/30)

棺内からは2体の遺骸が出土した。粘土枕のある東側に頭位をとる遺骸を1号人骨、逆方向西に頭位をとる遺骸を2号人骨とした。1号人骨は、頭部を粘土枕上に据えられて安置されているが、残存するのは粘土枕上の顎蓋骨のみでしかもその顎骨部分は腐朽し去っていた。2号人骨は比較的の保存状態もよく、埋葬時の姿勢を保っていた。棺には仰臥伸展で納められたらしいうが、下肢は1号人骨の頭部右側の方へ寄せられて安置されている。そのため、1号人骨頭部右脇の副葬品が散乱した状態で発見されており、追葬時に動いたものであろうと思われる。

これら2体の遺骸は、人骨の保存状態や埋葬姿勢、それに副葬品の散乱状況などから、同時

埋葬ではなく2号人骨が後から埋葬された追葬であると考えられる。九州大学医学部永井昌文先生の鑑定によると、1号人骨は30歳代の女性、2号人骨は50歳代の男性とみられ、男性の方は華奢な体格の主であったとされている。

### (3) 遺物出土状態

古墳からの出土遺物は、主体部に伴なう棺外出土品と棺内出土品がある。既に述べたように、重機による墳丘削平にもかかわらず主体部の保存は良好であったが、棺外の遺物は既に取り上げられていたり、あるいは原位置にあっても破損したりしていた。

出土遺物の一覧は下記の通りである。

棺外出土品	土 師 器 壺	1
鉄 鉢		1
鉄 刀 子 片		3

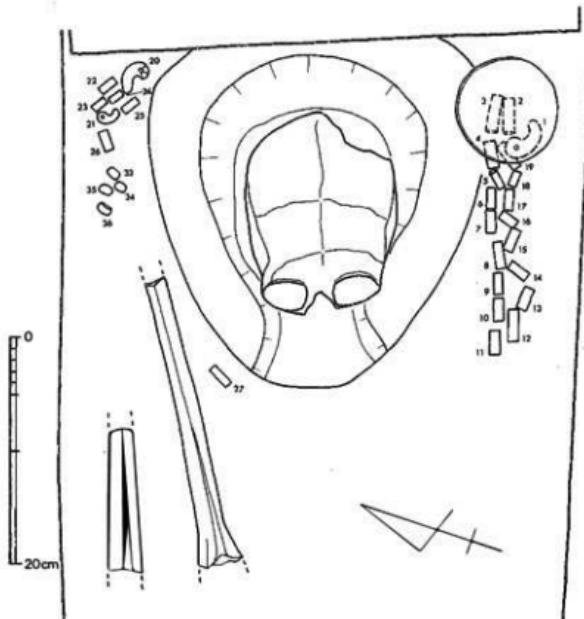


Fig. 3 遺物出土状態実測図 (1/5)

## 棺内出土品

(1号人骨頭部右脇)	勾玉	2
	管玉	6
	水晶算盤玉	1
	ガラス小玉	27
(1号人骨頭部左脇)	銅鏡	1
	勾玉	1
	管玉	18

棺外からの出土品は、土師器壺など3点がある。土師器壺は、石棺の東側墓壙掘り込み面付近にて口縁部を下にして出土した。重機により蓋石とともに一部破損しているが、本来は蓋石の下に置かれていたものである。鉄鉢は、壺とは反対側の棺外西側にて出土し、南側側板の西端上面に鋒を南に向けた状態で置かれていた。鉄刀子は3片出土し、1本分と思われるが接合しない。出土位置も不明である。

これら棺外出土品は、その出土状態などから土師器壺は1号人骨埋葬時の供献土器で、鉄鉢は2号人骨追葬時の副葬品とみられる。

棺内からの出土品は、いずれも1号被葬者に伴なう副葬品で、頭部粘土枕の左右両脇から出土している。頭部左脇の副葬品は銅鏡・勾玉・管玉で、勾玉と管玉は一連の状態で検出された。鏡は東小口板側の頭部よりや上方の位置に置かれ、鏡面を上にして一端は粘土枕に立て掛けている。この鏡の下から頭部方向にかけての位置で、翡翠製の勾玉1個を親玉とし管玉を18個一連に連ねたほぼ完全な状態の玉飾りが出土している。頭部右脇出土の遺物は、勾玉・管玉・算盤玉・ガラス小玉などの玉類ばかりであるが、2号人骨追葬時に遺骸足部をこの位置へ安置したため玉類は散乱し、本来の配置を留めていない。勾玉・管玉類は頭部上方にみられ、算盤玉・ガラス小玉はそれより下位の位置にて出土している。

これら、1号人骨頭部両脇に見られる副葬品は、鏡を除くと玉類ばかりの装身具である。特に、左脇出土の玉類は19個一連で出土し、勾玉を頂として管玉をほぼ平行するよう整頓して並べられ、しかも粘土枕外縁沿いに頭頂部から頭部の位置にかけて直線的に置かれている。この一連の玉飾りを観ると、総延長約44cm、環状時の径約16cm、重さ約49gを復元できる。以上のことから、頭部左脇出土の玉飾りは、髪飾りではなく、被葬者が生前に着装していた頭飾りを死後頭からはずし、埋葬時にそろえて頭部脇へと置いたものと思われる。また、右脇出土の玉飾りを復元すると、総延長約25cm、環状径約8cm、重さ14gをはかる。頭飾りとしては小さく、髪飾りかあるいは手首飾りとして使用していたのかもしれない。

#### (4) 出土遺物

##### 変形神人鏡 (口絵 1, PL. 6, Fig. 4)

面径9.6cmの仿製鏡である。出土時は青緑色の銹が表裏全面に附着していて鏡背文様は不鮮明であったが、銹落し後は鏡本来の地肌にちかい光沢をもった茶黄色の良好な面が表わされた。鏡背の一部には赤色顔料の付着がみられ、鏡面は平滑な凸面をなしている。鏡背文様も細部まで比較的容易に観察でき、仿製鏡にしては鋳上りもよく良質な鏡である。鉢は径1.71cm、高さ0.95cmの円鉢であるが、頂部はやや平たくなり、平面は分鋼型をなす。鉢孔は不整梢円形で、神像から神像方向へと貫通している。鉢座は有節重弧文圓座を略したもので、弧線を同一方向

にくり返し、節は梢円形状のものを4個神人頭頂部上付近に配している。また、鉢座の外側にも珠文圓を巡らしている。

内区には径3.4mmの乳が4個配置され、鉢をはさむ一对の乳は上下端が切れた二重の圓座を有し、他の一对は、同様な圓座にさらに擬文圓座の名残を留める弧文を1個あるいは2個加えている。4乳に分割された区画内には、下半身の部分を喪失し頭部のみを誇張して表現した神人像が1体づつ配置されている。こ

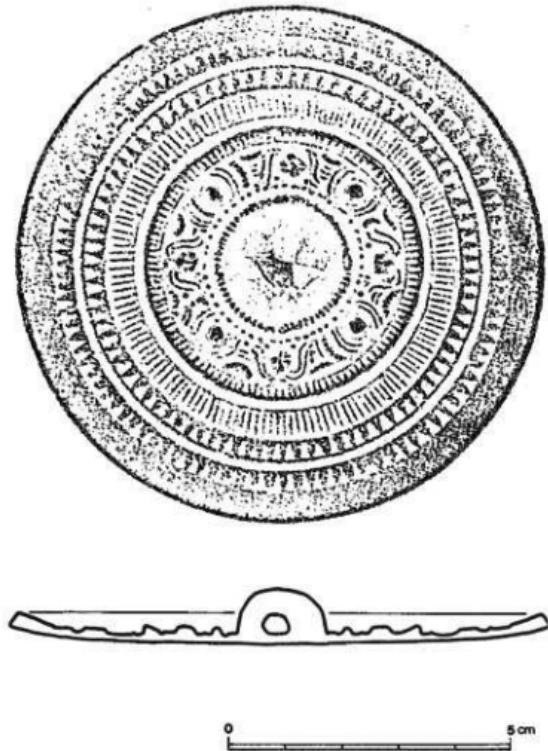


Fig. 4 変形神人鏡拓影 (実大)

の誇張された像を、神人とみるか獣首とみるか判断に迷うところであるが、後述するとおり両脇には有翼をつけており、この有翼は神人の領巾を表わしているものと考え、神人と判断した。神人の顔の細部は、不鮮明であるが、径4.5mmほどの瘤状に膨らんだ隆起部に、弧形で眉と眼を示し、中央部に鼻筋を太く強調して表現している。頭部下端の口元からは、左右2本の線を上方へ延ばして反転させ、有翼をついている。さらに、頭部左右と有翼との間には2個の珠文を配し、有翼の両脇にも傘松形文を略したと思われる房を、珠文で弧状に3段積み上げて表現している。これらを囲む円圏は1段高く造り、内側斜面には細かい内向鋸歯文帯を巡らす。内区を区画する銘帯には銘はみられず、1mm強間隔の櫛歯文で埋めている。その外側は縁へと順に外向鋸歯文帯、無文帯、外向鋸歯文帯とつづき、平縁の周縁へと至る。無文帯には本来波文が入るべきところであるが、当鏡では内側の鋸歯文の頂点がつき抜けている個所もある。

鏡の計測値は、内区厚1.5mm、外区厚2mm弱、鉢高9.55mm、縁厚3.1mm、反り2.5mmで、重量は102.2gを測る。

#### 土師器壺 (PL. 7-1, Fig. 5)

石棺の東棺外より出土し、破損していたが器形はほぼ復原できた。それによると、口径11.3cm、胴径13.6cm、器高11.8cmを測る小形の壺である。口縁部は直線的に「く」の字状に外反するが、端部付近ではわずかに内湾気味となる。肩部はあまり張らずにやや扁球形の胴部へと続く。胴最大径は器高の中位にあり、底部は欠損しているが丸底になるものと思われる。

口縁部内外面は横ナデ、体部外面は指で押えたらしくゆるい凹凸面がみられ、ナデ仕上げである。頸部と胴下半の内面は指押えの跡が残り、その上からナデしている。器壁はやや厚手で、胎土は小砂粒を含み、焼成は軟質である。色調は黄褐色を呈するが、胴上半部にはススが附着し、下半部は茶褐色に赤変していて火気を受けたことがわかる。また、肩部内面の一部には布目压痕がみられる (Fig. 6)。

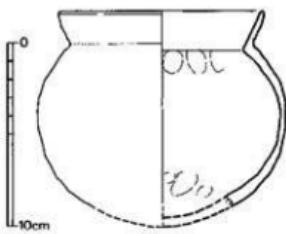


Fig. 5 土師器壺実測図 (1/3)



Fig. 6 土師器壺付着布目压痕

鉄 鋒 (PL. 7-2, Fig. 7-1)

石棺の西棺外より出土したもので、2号被葬者に伴なう副葬品と思われる。全長26.1cm、刃部長12.6cm、刀部幅2.4cmを測るが、刃こぼれが著しい。鐔は両鐔で鋒まで通り、刃部断面は薄い菱形である。関はつくらず、体部断面は長方形に近い菱形となる。袋部はまげ合わせで造り、その基端は三角形に切り込む。断面は径 $2.8 \times 2.5$ cmの円形をなす。袋部側面には径4mmの目釘穴がみられるが、反対側は不明である。袋内部は鋳化して詰まっており、袋合せ目付近には布目压痕がみられる(Fig. 8)。

鉄 刀 手 (PL. 7-3, Fig. 7-2)

棺外出土であるが、調査前に取り上げられていて出土位置は不明である。図示したものの他に小片が2個ある。おそらく1本分になるものであろうか接合しない。図示した小片は現在長4.3cm、最大幅1.5cmを測る。

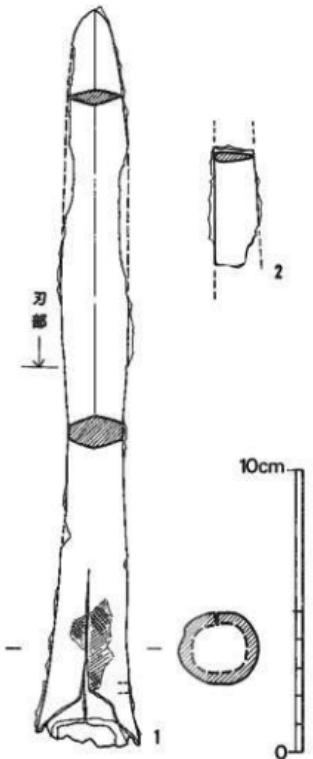


Fig. 7 鉄器実測図 (1/2)

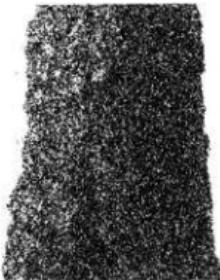


Fig. 8 鉄鉢付着布目压痕

玉 類 (PL. 7-4・5, Fig. 9, Tab. 1-4)

勾玉 (1・20・21) 質の悪い翡翠製の勾玉で、1は頭部から胴部にかけて緑味灰色を呈し尾部は暗い青緑を呈している。全長30.8mm、厚さ(穿孔部、以下同じ)8.3mm、重さ6.7g強である。穿孔は一方向から行われている。20は、頭部は明るい緑色を呈し、胴部から尾部にかけ

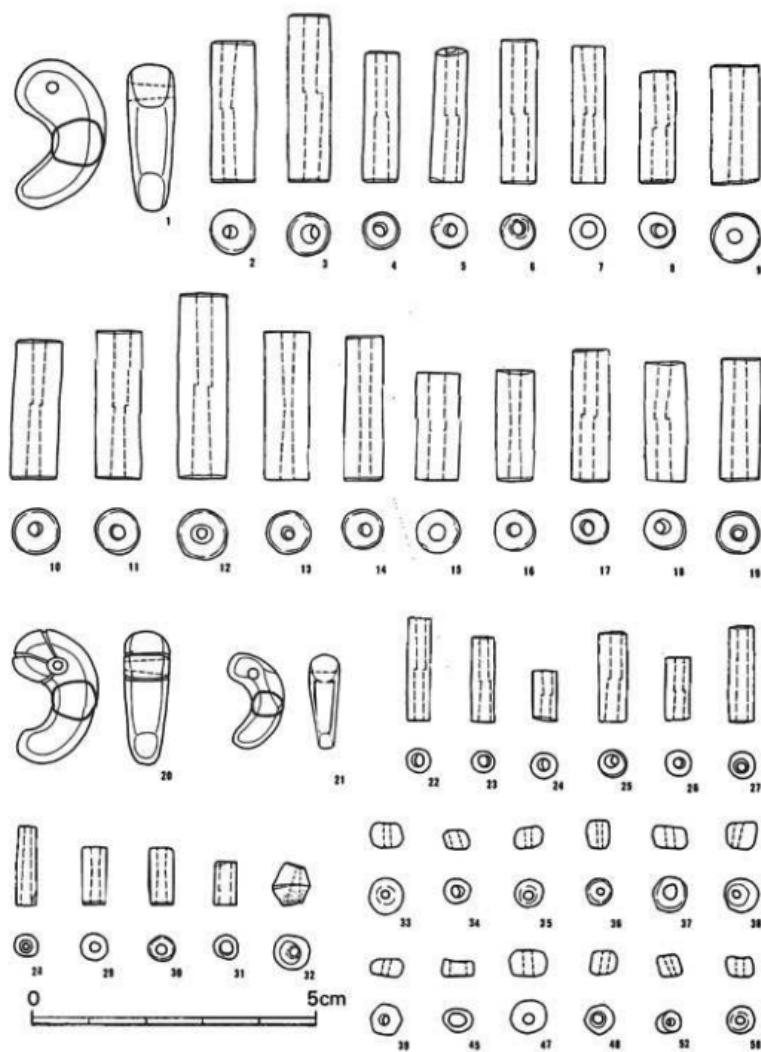


Fig. 9 玉類実測図(実大)

て灰味黄緑色に暗い青緑色の斑点状を呈している。全長23.6mm、厚さ8.5mm、重さ4.5g弱である。また、頭部には孔より3条の溝が認められ、T字頭の形式である。21は、頭部から腹部にかけて薄黄茶色を呈し、肩部から尾部にかけて綠味白色を呈し、綠色の脈が走っている。全長7.15mm、厚さ5.0mm、重さ1.3g強である。片面尾部に幅3mm、長さ7mmの抉れ痕が認められる。いずれも一方向からの穿孔である。出土位置はいずれも1号人骨頭部脇で、1が頭部左脇より出土し、管玉と一連になるものである。20・21は頭部右脇出土であるが散乱した状態で出土している。

管玉（2～19・22～31） いずれも碧玉製の管玉で、1号人骨頭部左脇で出土したものは2～19で、22～31は頭部右脇付近よりの出土である。色調はマンセル色記号表によると13色に分類でき、(注1)にぶい緑色などに代表される色を基調とする材質である。また、径による形態の違いによりA～Dの4種類に類別できる。Aは中膨らみのもので、上下の径に比し中央部の径が大きく、いわゆるエンタシス状をなすもので、10個ある。BはAの逆で、中細りのものをさし上下の径が中央部径よりも大きいもので、2個ある。Cは上・下・中央部とも同じ径で、円柱状をなすもので1個ある。Dは最も多く15個を数え、一端が序々に細くなっているものをいう。穿孔の方向は19・27・28の3個を除いてすべて両面より行なわれている。なお、頭部左脇より出土したものが右脇出土のものよりも比較的大きく、明確に区分できる(Fig.10)。この違いは何らかの要因によるものであろう。

算盤玉（32） 1号人骨頭部右脇より1個出土しているが位置ははっきりしない。水晶製で白濁した透明を呈し、長さ7.4mm、最大径6.2mm、重さ0.4gを測る。穿孔は一方向よりなされ、上下の角が同一方向に欠けている。これはひも擦れ等の自然的なものか、あるいは作為的なものかは判然としない。

ガラス小玉（33～59） 全て頭部右脇付近よりの出土で、総数27個である。そのうち出土位置が明確なものは33～36である(Fig.3)。色調は青緑を基調とするもので8色に分類される。大きさは径3.9～6.5mm、厚さ2.75～5.2mm、孔径1.0～2.8mmである。気泡のあり方からガラス管状に引き延ばし、それを切断後に切断面を整形したと思われるものが20個検出され、他は同様の製作によるものか、あるいは、棒状のものに熔解ガラスを巻き付けて製作したものかは判然としない。また、33・47は他の玉に比して丸味を帯び、球形を呈している。計測値はTab.4の通りである。

以上の玉類が1号人骨の副葬品で、被葬者は比較的豊富な装身具を身につけていたことが窺われる。これら玉類はその形状から何種類かに類別されるが、なかでも管玉については特徴的な区分が見い出せる。

管玉の計測値を長さと径によりグラフで示すとFig.10のようになる。それによると頭部左右の出土位置で管玉を明確に2群に大別できる。頭部左脇出土のI群、右脇出土のものをII群とし、さらにそれらを各々2類に分類することができる。すなわち、I群はA・Bに類別され、

Tab. 1 勾玉計測表

No	全長 (mm)	側部幅 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	重さ (g)	穿孔方向	材質	色調			備考	
								頭部	胸部	尾部		
1	30.8	10.3	8.3	6.2	3.25	2.3	6.7強	片	翡翠	greenish gray (10.0G 7.0/1.0)	dark blue green (1.0BG 3.0/3.5)	
20	23.6	8.2	8.5	6.3	2.6	1.6	4.5強	#	#	light green gray yellow green (3.0G 6.5/3.5) 12.0G 6.0/0.5	dark blue green (1.0BG 3.0/3.5)	T字類
21	7.15	6.05	5.0	3.7	2.5	2.2	1.3強	#	#	pale yellow brown (1.0Y 7.5/2.0)	greenish white green (2.0G 8.5/1.0) 12.0G 5.0/0.5	

Tab. 2 管玉計測表

No	径 (mm)			長さ (mm)	重さ (g)	材質	穿孔方向	色調			備考
	上端	上孔中位	下端					#	#	#	
2	7.65	1.8	7.6	7.65	2.1	24.7	2.6	碧玉	black	dull green (8.5G 4.5/3.0)	B
3	7.4	1.9	7.5	2.4	7.2	29.4	2.9	#	#	#	A 同様部数ヶ所欠けている
4	6.05	2.0	6.1	1.55	6.05	23.3	1.5強	#	#	#	
5	5.95	1.85	6.0	1.7	5.9	23.1	1.4強	#	#	#	
6	6.3	2.15	6.25	2.25	6.15	25.4	1.7	#	#	#	
7	5.9	2.55	5.9	2.0	5.8	23.8	2.4強	#	#	#	
8	6.3	2.1	6.3	1.75	6.15	19.9	2.2強	#	#	#	
9	8.75	1.9	8.65	1.9	8.65	21.1	2.9強	#	#	#	
10	8.4	1.9	8.3	1.75	8.4	24.2	3.2	#	#	#	
11	8.0	2.0	8.05	2.6	8.0	26.25	3.0強	#	#	#	
12	8.7	3.05	9.2	2.8	9.0	32.1	4.5強	#	#	#	
13	7.95	1.8	7.95	2.0	7.95	26.5	3.0強	#	#	#	
14	7.0	1.85	6.75	1.95	6.5	25.7	2.1強	#	#	#	
15	7.9	2.7	7.6	2.45	7.5	19.25	1.8強	#	#	#	
16	7.2	1.85	7.05	1.9	7.0	19.35	1.7強	#	#	#	
17	6.25	2.0	6.3	2.05	6.25	23.1	1.6	#	#	#	
18	7.1	2.15	7.25	2.15	7.15	20.75	1.9	#	#	#	
19	7.25	2.4	7.25	1.6	7.2	21.5	2.05強	#	#	#	
22	4.05	1.75	4.1	1.8	4.05	18.3	0.5強	#	#	#	
23	4.65	1.8	4.6	1.95	4.55	14.75	0.4強	#	#	#	
24	4.4	1.8	4.35	4.3	1.9	8.4	0.25強	#	#	#	
25	4.75	2.15	4.8	4.7	1.85	15.5	0.6	#	#	#	
26	4.5	1.6	4.4	4.4	1.5	11.0	0.4	#	#	#	
27	4.45	1.6	4.5	4.4	2.1	16.55	0.5強	#	#	#	
28	3.9	1.6	3.9	3.85	1.6	14.0	0.35強	#	#	#	
29	4.45	1.5	4.4	4.35	1.55	9.8	0.3	#	#	#	
30	4.5	1.5	4.5	4.4	1.3	9.65	0.3	#	#	#	
31	4.3	1.9	4.4	4.15	1.5	8.1	0.2	#	#	#	

\*径における上・下端は任意的に決定した。また、中位は玉形状的特徴を示す部位(脚み・茎み)について行なった。

Tab. 3 算盤玉計測表

No.	径 (mm)						長さ (mm)	重さ (g)	穿孔方向	材質	色調
	最大	上端	上孔	下端	下孔						
32	6.2	4.9	1.6	4.5	0.65	7.4	0.4	片	水晶	白濁不透明	

Tab. 4 ガラス小玉計測表

No.	径 (mm)	孔径 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	色調	製作技法	備考				
	最大	最小	上	下	最大	最小					
33	6.3	6.15	1.35	1.1	4.9	4.65	0.2弱	greenish blue (6.0B 4.0/5.0)	A	気泡多數含	
34	4.6	4.15	1.65	1.6	3.15	2.9	0.1以下	pale greenish blue (2.5B 6.0/6.0)	#	気泡少數、内部に孔に添って線状のもの有	
35	5.1	4.8	1.4	1.35	3.7	3.5	0.1以下	dull blue green (1.5B 5.0/4.0)	#	気泡少數有	
36	4.55	4.3	1.4	1.15	4.85	4.3	0.1弱	greenish blue (6.0B 4.0/5.0)	B	樽円形狀の孔 (0.95~1.4mm)、 気泡僅少	
37	6.25	6.15	2.0	2.0	4.1	4.0	0.2	#	A	気泡少數有、樽円形狀の孔 (1.5~2.0mm)	
38	6.15	5.8	1.35	1.3	5.15	4.85	0.2	blue green (6.5BG 4.5/8.5)	B	気泡少數、内・外面に孔に添って線状のもの有	
39	5.55	5.3	1.9	1.75	3.05	2.75	0.1	deep blue green (10.0B 3.5/8.0)	A	大形の気泡少數有	
40	5.7	4.8	1.55	1.5	4.25	3.5	0.1	pale greenish blue (2.5B 6.0/6.0)	B	気泡多數含む	
41	5.35	4.85	2.8	2.75	4.1	3.7	0.1以下	dull blue green (10.0BG 5.5/5.5)	A	樽円形狀の孔 (2.15~2.8mm)、 気泡少數含む、内部に孔に添って線状のもの有	
42	4.95	4.15	1.5	1.5	4.4	4.2	0.1	deep greenish blue (7.5B 3.0/4.0)	B	気泡僅少、樽円形狀の孔 (1.0~1.5mm)	
43	5.2	5.1	1.6	1.55	3.65	3.4	0.1	dull blue green (10.0BG 5.5/5.5)	A	丸味を持ち気泡僅少、表面状のもののが孔に添って走る	
44	4.35	4.2	1.7	1.6	3.8	3.45	0.1以下	#	B	気泡少數含	
45	5.1	4.85	2.35	2.2	3.35	3.05	0.1以下	dark blue green (9.0BG 3.5/4.0)	A	樽円形狀の孔 (1.9~2.3mm)、 表面に凹凸有、内部に孔に添って線状のもの有	
46	4.9	4.8	1.45	1.35	5.0	4.65	0.1	#	B	気泡僅少	
47	6.5	5.95	1.4	1.0	4.3	4.2	0.2	deep blue green (10.0BG 3.5/8.0)	A	気泡少數含	
48	5.0	4.55	1.7	1.5	4.0	4.05	0.1	greenish blue (6.0B 4.0/5.0)	#	気泡無、側面やや角張っている	
49	4.45	4.25	1.2	1.2	4.8	4.65	0.1	#	#	気泡無	
50	6.05	5.65	1.85	1.55	3.8	3.7	0.1強	deep blue green (10.0BG 3.5/8.0)	#	気泡多數有	
51	5.0	4.45	2.35	2.1	3.7	3.55	0.1以下	dull blue green (10.0BG 5.5/5.5)	#	気泡少數、内部に孔に添って筋状のもの有	
52	4.0	3.9	1.25	1.2	3.9	3.85	0.1以下	#	#	内部に孔に添って筋状のもの有	
53	4.75	4.45	1.85	1.8	4.85	4.55	0.1	#	#	表面に孔に添って条状のもの有	
54	4.4	4.2	1.4	1.3	4.65	3.9	0.1以下	deep blue green (10.0BG 3.5/8.0)	#	気泡多數含	
55	5.55	5.0	1.55	1.5	3.5	2.95	0.1	dark blue green (9.0BG 3.5/4.0)	#	切り残しによる突出部有	
56	5.8	5.3	1.65	1.5	4.5	4.4	0.2	deep blue green (10.0BG 3.5/8.0)	B	気泡僅少	
57	4.5	4.15	1.2	1.15	5.2	5.15	0.1弱	greenish blue (6.0B 4.0/5.0)	A	気泡僅少、側面やや角張る	
58	5.05	4.8	1.65	1.6	3.55	3.25	0.1以下	#	#	気泡少數有	
59	4.5	4.3	1.35	1.3	4.0	3.75	0.1以下	dull blue green (1.5B 5.0/4.0)	#	内面に孔に添って筋状のもの有	

A類は径7.6~9.2mm、長さ29.4~32.1mmであり、B類は径5.8~8.75mm、長さ19.25~26.5mmとなる。しかし、A・B両類は孔径やFig. 10の径だけの関係などからして同類型と思われる。II群もまた2類に類別され、C類は径3.85~4.8mm、長さ14~18.3mmを測り、D類は径4.3~4.5mm、長さ8.1~11mmを測る。これらII群もI群と同様にC・Dの類別は明確なものとはい難く、孔径の関係を見ると類別しかねる。また、孔径の最小値が30の1.3mmであり、同等の幅の工具を使用したものと思われ、両面穿孔の管玉のほとんどが孔中央部がすぼまっている、工具先端が円錐状か角錐状の工具によって穿っているようである。(平島文博)

註1. 日本色彩社「Tobay's COLOR 300」1976によるものである。表における色調も本編によって類別を行った。

註2. 由水常雄「東洋古代ガラスの技法」「MUSEUM」324(1978. 3) 本著ではガラス玉の製作について3技法が考えられているが、本資料においては、ガラス玉が極めて小形であるため、引延法と巻付法の2技法であると思われる。Tab. 4においてAは引延法によるもの、Bは不明のものと類別している。

## (5) 小 結

城の谷古墳は、わずか2日間という短期間の調査であったが、豊富な資料の検出をみるなど多大な成果を上げることができた。それらの内容は前章で述べた通りであるが、以下これら副葬品を中心として古墳の問題点について述べ、まとめとした。

### ① 古墳の立地と内部主体について

八女平野の中央部には岩戸山古墳を盟主とする多数の大型古墳が連続して所在する八女丘陵が7~8kmにわたって位置しているが、城の谷古墳の所在する丘陵は、八女平野のなかでも東端最奥部に伸びている。このことは、城の谷古墳が八女平野の「はずれ」に位置しているというのではなく、逆に平野の「要」に選ばれて築造していることを示すものといえる。また、八女丘陵の諸大型古墳は、一般的に、丘陵の西から東へと順次築造されたとされている。当墳はそれら諸大型墳とは丘陵を異なるが、平野の東端に位置している。これらのことから、城

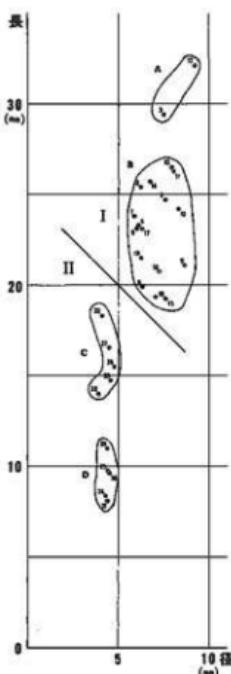


Fig. 10 管玉計測値分布図

の谷古墳は、八女丘陵上の古墳群とは別の観点から見直す必要があろう。そして今後は、岩戸山古墳以前の八女平野を考える上では無視することのできない重要な古墳でもある。

また、古墳の内部主体は組合せ式箱式石棺であった。その特徴を要説すれば、

1. 両側板が小口板を挟み、側板が小口よりはみ出す組合せ式木棺に似た形式のものである。
2. 石棺に使われた棺材は、地元で産する「長野石」で、黒灰色の地肌をした凝灰岩である。
3. 石棺四壁には加飾的に見える工具痕が残され、全面丹塗りである。
4. 棺底には粘土を張り、その上に玉砂利を敷き詰めて死床とし、東側には馬蹄形を呈する石枕状の粘土枕を付設している。

といった点である。

こうした箱式石棺は、九州においては弥生時代以来の伝統的な墓制で、古墳時代を通じても広く行われている。しかし、明らかに高塚古墳と識別される定形化した古墳の主体部に、箱式石棺を取り入れたものは県下でも以外と少ない。

今代表的なものについて挙げると、久留米市祇園山古墳、那珂川町炭焼2号墳、同油田2号墳、<sup>(註1)</sup>頬田町きょう塚古墳、などがあり、近年の調査例では、津屋崎町奴山5号墳、太宰府市宮ノ本1・2・4・6号墳、宗像市久戸4・6号墳、福間町手光南1号墳、などがあり、ほとんどが4世紀後半から5世紀前半の時期に比定されている。

これら箱式石棺を内部主体とする古墳で、最も遡るものとしては県外ではあるが大分県の赤塚古墳があり、4世紀前半代のものとされている。また、新しいところでは、那珂川町野口1号墳のように6世紀後半にまで下るものもあって、伝統的な墓制であることが窺われる。

一方これら箱式石棺が古墳の主体部として受け継がれている4世紀後半の時期といえば、既に畿内型古墳文化の影響が九州にも及んでいる時期であるが、古墳主体部に、畿内型古墳に多くみられる竪穴式石室や粘土構造などを取り入れずに、依然旧来の箱式石棺という葬制を踏襲していることは、被葬者の土着性の強さを示すものとして、多くの人に指摘されているところである。

城の谷古墳も、こうした流れの中にあって、伝統的な墓制から脱却できなかったより在地性の強い被葬者の奥津城ということができよう。

註1. 「祇園山古墳」「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」XXIV 福岡県教育委員会 昭和54年

註2. 「炭焼古墳群」「福岡県文化財調査報告書」第37集 福岡県教育委員会 1968

註3. 「油田古墳群」「福岡県文化財調査報告書」第42集 福岡県教育委員会 1969

註4. 「嘉德郡頬田町きょう塚古墳発掘調査報告」「福岡県文化財調査報告書」第21集 福岡県教育委員会 昭和36年

註5. 「奴山5号古墳」津屋崎町教育委員会 1978

- 註6. 「宮ノ本遺跡」『太宰府町の文化財』第3集 太宰府町教育委員会 1980
- 註7. 「久戸古墳群」『宗像町文化財調査報告書』第2集 宗像町教育委員会 1979
- 註8. 「手光古墳群I」『福間町文化財調査報告書』第1集 福間町教育委員会 1981
- 註9. 小田富士雄・眞野和夫・小倉正五「豊前・宇佐地方における古式古墳の調査」『考古学雑誌』第60巻第2号 昭和49年
- 註10. 「野口遺跡」『那珂川町文化財調査報告書』第4集 那珂川町教育委員会 1979

## ② 粘土枕について

箱式石棺底面には、高縁をつけ、中央部から頭部にかけて凹ませた馬蹄形の粘土枕が付設されていた。古墳時代にみられる枕には、粘土枕のほかに割竹形石棺や舟形石棺などの石棺造付けのものや、単体の石枕、埴製枕、自然石利用の枕などがある。これらのうち、出土例では単体の石枕が最も多く、主として関東地方を中心の中・後期の古墳に多くみられ、造付け枕は西日本の前期古墳を中心に分布しているが、粘土枕、自然石の枕などは少ない。また、単体の石枕は、石棺造付け枕から遊離して定形化したものとされている。<sup>(註1)</sup>

県内における古墳出土枕としては、下記のものが知られる。

### (石棺造付け枕)

三池郡高田町石神山古墳 (舟形石棺)

糸島郡二丈町長須隈古墳 (〃)

### (単体石枕)

嘉穂郡桂川町王塚古墳 (横穴式石室)

久留米市浦山古墳 (横穴式石室、家形石棺)

〃 日輪寺古墳 (横穴式石室)

田川市位登古墳 (箱式石棺)

福岡市五島山古墳 (箱式石棺)

### (粘土枕)

八女市城の谷古墳 (箱式石棺)

太宰府市宮ノ本1号墳第1主体 (箱式石棺)

〃 2号墳 (箱式石棺)

〃 6号墳 (箱式石棺)

筑紫郡那珂川町炭焼3号墳 (組合せ式木棺)

〃 油田1号墳 (木棺)

〃 2号墳 (箱式石棺)

〃 妙法寺3号墳 (木棺)

### 行橋市稻童12号墳（箱式石棺）

- 〔註13〕  
〃 竹並G-5号墳1号主体部（箱式石棺）  
〃 〃 2号主体部（箱式石棺）  
〔註14〕  
甘木市持丸6号墳A棺（箱式石棺）  
〔註15〕  
〃 池の上1号墳3号主体部（箱式石棺）  
〔註16〕

以上、古墳出土の枕は17例を数えるが、五島山古墳のものは石枕ではなく、土枕ともいわれている。

これらのうち粘土枕が最も多く12例を数えるが、粘土枕を有するもののうち炭焼3号・油田1号・妙法寺3号墳を除いたものはすべて内部主体を箱式石棺としている。箱式石棺で単体石枕を有するものは五島山古墳と位登古墳のみである。

これら箱式石棺に設置された粘土枕は、城の谷古墳や油田2号墳、池の上1号墳例のように石枕状に粘土塊中央部を凹ませるものと、宮ノ本古墳例のように上面は平坦面で、小口幅全面に粘土帯を貼り付けるものとがあり、後者が多くみられる。

一方、こうした古墳主体部以外の埋葬施設に枕を設置するものは、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての箱式石棺墓や土壙墓などにも多く見られるが、それらの多くは単に粘土塊や板石あるいは自然石を置いたもの、あるいは棺底面を削り出したものなどで、明らかに古墳出土の枕とは区別できる。ただ、今のところ両者の関連性ははっきりしないし、その初源もいつまで遡り得るかについての資料もまだ十分に掌握しておらず、これらの点については今後の課題としたい。

古墳出土の枕で、比較的年代のはっきりしているものは次のようなものが知られている。単体石枕の祖形とされる石棺造付け枕では、香川県快天山古墳出土の割竹形石棺があり、4世紀後半とされている。石棺から分離した単体石枕を有する古墳では、岡山県新庄天神山古墳が知られる<sup>〔註17〕</sup>。石枕と同様な埴製枕を出土した大阪府燈籠塚古墳とほぼ同じ4世紀後半の年代が与えられており、石棺造付け枕も単体の枕もほぼ4世紀後半頃に出現したものと考えられる。また、昭和54年には全国出土石枕の集がなされたが<sup>〔註18〕</sup>、粘土枕についても触れられており、それによるとわずかに福岡県と熊本県とで4例が示されているに過ぎず、全国的に見た場合の粘土枕の数や時期はわかっていない。

一方、県内例では、舟形石棺に造付け枕を有する長須限古墳が5世紀初頭に比定され、単体石枕を有する五島山古墳の年代は4~5世紀前後のものである。また、粘土枕を有する油田2号墳は4世紀中頃とされ、今のところこれが最も古く、炭焼3号墳が4世紀後半で油田2号墳につづくものである。

以上のことから、県内における古墳主体部に付設された枕は、油田2号墳の粘土枕を最古とし、5世紀中頃までには各種の枕が出そろい、やがて古墳時代後期の横穴式石室の石枕や、横

穴の死床造付け枕などへと受け継がれたものであろう。

(註22)

当墳出土の枕は、粘土枕であるか形態的には石棺造付け枕や単体石枕に類似しており、これらからの影響を受けたものと考えることができるかもしれない。もし、そうであるとすれば何故石枕を作らなかったのであろうか。不自然なことに棺本体には地元産の加工しやすい凝灰岩を使用しているのに、枕に限っては粘土を使っている。粘土製と石製との間に使用上の制約があったのかとも考えるが定かではない。

最後に、こうした「枕を具えた死者は、いずれも極めて優れた地位にある者であり、その土地その土地の首長とも見なすべき者である」ともいわれているように、丁寧な造りの粘土枕を有した本墳の被葬者も、地位の高い人物であったことが想像される。

(註23)

以上、城の谷古墳出土の粘土枕を通して県内出土の古墳時代の枕について概観したがその出自や系譜の問題、さらにはその使用上の区別、使用者の身分の問題など解決されるべき問題点は多々とあり、古代人には安らかな眠りを与えてくれる「枕」も、我々現代人にとっては頭の痛い「枕」もある。

註1. 古墳時代の枕について論じたものには下記のようなものがある。

龜井正道「古墳出土の石枕について」『上代文化』第20輯 昭和26年

安藤孝一「古代の枕」『月刊文化財』昭和54年3月号 昭和54年

沼沢 豊「石神2号墳の諸問題」『東寺山石神遺跡』千葉県文化財センター 昭和52年

註2. 「上楠田の石神山古墳」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第一輯 福岡県 大正14年  
年

註3. 柳田康雄「長須隈古墳」「末盧国」唐津湾周辺遺跡調査委員会編 1982

註4. 「筑前玉塚古墳」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第11輯 福岡県 昭和10年

註5. 「上津荒木浦山古墳」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第1輯 福岡県 大正14年

註6. 「日輪寺古墳」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第1輯 福岡県 大正14年

註7. 「豊前猪位金村位登古墳」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第9輯 福岡県 昭和  
9年

註8. 「五島山の石棺」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第1輯 福岡県 大正14年

註9. 「宮ノ本遺跡」『太宰府町の文化財』第3集 太宰府町教育委員会 1980

註10. 「炭焼古墳群」『福岡県文化財調査報告書』第37集 福岡県教育委員会 1968

註11. 「油田古墳群」『福岡県文化財調査報告書』第42集 福岡県教育委員会 1969

註12. 「妙法寺古墳群」『那珂川町文化財調査報告書』第7集 那珂川町教育委員会 1981

註13. 「稻童古墳群第2次調査抄録」蔵内古文化研究所 1965

註14. 「竹並遺跡」竹並遺跡調査会 1979

註15. 「持丸古墳群」『甘木市文化財調査報告書』第1集 甘木市教育委員会 1974

註16. 「池の上墳墓群」『甘木市文化財調査報告』第5集 甘木市教育委員会 1979

註17. これらの遺跡としては下記のものなどがある。

久留米市高良山礫山

〃 穂園山・七曲山古墳

鞍手郡若宮町沙井掛遺跡

筑紫野市唐人塚遺跡

行橋市竹並遺跡

なお、これらのように集団墓の形態をとらずに単独出土のものを加えると更に多くの出土例がある。

註18. 「快天山古墳」『古墳辞典』東京堂出版 昭和57年

註19. 「新庄天神山古墳」『古墳辞典』東京堂出版 昭和57年

註20. 「口絵解説 墳製作」『月刊文化財』第1法規 昭和54年3月号

註21. 「日本の石枕」千葉県立房総風土記の丘 昭和54年

註22. これらの遺跡としては下記のものなどがある。

中間市羅漢山横穴群

鞍手郡鞍手町古月横穴群

註23. 水野正好「古事記と考古学」「古事記」社会思想社 昭和52年

### ③ 変形神人鏡について

城の谷古墳出土の鏡は、仿製の変形神人鏡である。この鏡の特徴は、鏡背内区に頭部のみを誇張した神人を4乳の間に配して主文様としたもので、内区・外区ともに省略した個所もあるが、三角縁神獸鏡に見られる傘松形文様のものを現わすなど、一応この種の鏡の文様構成を踏襲しており、三角縁神獸鏡の系譜をひく鏡ということができるよう。

ところで、この鏡は、以上の特徴などから以前後藤守一氏が『漢式鏡』において「獸首鏡」とされた一群の鏡に類似しており、『漢式鏡』には獸首鏡として次の3例が挙げられている。  
(註1)

美濃国稻葉郡常磐村大字打越ト城田寺トノ境(筆者註以下同じ、現岐阜市坂尻古墳)

周防國佐波郡西浦村字吳山(現防府市西浦 男山古墳)

肥後國八代郡龍峯村大字岡谷川字門前(現八代市岡町 門前第1号墳)

また、樋口隆康氏は、「古鏡」のなかで、仿製鏡のうち獸形ではなく、神像だけを鉢をめぐらして内向的に配したものを「神像鏡」とし、さらに神像の頭部だけを乳間においたものを頭部の数によって八頭式・六頭式・五頭式・四頭式に区分され、下記の8例を示されている。

佐賀県鳥栖市麗町 薄尾古墳出土鏡(八頭式)

熊本県八代市岡町 門前第1号墳出土鏡(六頭式)

- 山口県防府市西浦 男山古墳出土鏡（六頭式）  
鳥取市久末 六部山3号墳出土鏡（六頭式）  
岐阜県本巣郡糸貫町 舟木山24号墳出土鏡（六頭式）  
佐賀県佐賀郡大和町 春日野口出土鏡（五頭式）  
福岡県宗像郡玄海町田島 上高宮古墳出土鏡（四頭式）  
五島美術館藏鏡（四頭式）

これらのうち、後藤氏が挙げた肥後国例は樋口氏例の門前第1号墳で、同じく周防国例は男山古墳のことであるが、それらを後藤氏は獸首鏡とされているのに対し樋口氏は神像鏡として取り扱っている。また、樋口氏が神像鏡としている六部山3号墳出土鏡は、島根県立八雲立つ風土記の丘資料館発行の特別展図録では、「変形獸首鏡」となっている。一方、田中琢氏は中國鏡と倭鏡（倭人の製作した鏡）の図像文様を対比し、その差位のなかから倭鏡の特質を見い出す作業を進められているが、氏はそのうちの伝和歌山県出土鏡（五島美術館蔵、径13.4cm）を、昭和54年刊の文献では、「神人倭鏡」とされ、その後の昭和56年刊の文献では「獸頭倭鏡」<sup>(註4)</sup>と変更されている。

以上のように、この一群の鏡は研究者間において鏡名が統一されていない。つまり、鏡背内区主文様の誇張された瘤状の頭部を「神人」と見るか、あるいは「獸首」と見なすかによって分類が異っているものといえよう。筆者には、今それらを明解に区分すべき基準を持ち合わせておらず、今後の研究課題としたいが、この問題は、単に「神」か「獸」かといった二者択一的なことだけではなくに、古墳時代の仿製鏡の系譜を考える上でも避けては通れない問題である。

さて、これら「神人鏡」あるいは「獸首鏡」などといった「主文に頭部のみを誇張して表現した一群の鏡」は、ほぼ4世紀後半から5世紀前半にかけての古墳に多く見られる。時期のわかる代表的なものとしては、岐阜県舟木山24号墳がある。<sup>(註5)</sup>この古墳は円墳で、内部主体は割竹形木棺であったと推定されているが、出土遺物としては、六神鏡2面のほかに画文帯神獸鏡や内行花文鏡などの鏡類をはじめ、袋身具・鉄製品など豊富な副葬品があり、4世紀後半から5世紀初頭のものとされている。また、城の谷古墳とは最も近いものとしては福岡県上高宮古墳がある。この古墳の内部主体は副室をもつ箱式石棺であるが、城の谷古墳出土鏡に似た鏡は「四乳紋文鏡」とされている。<sup>(註6)</sup>他に横矧板革縫短甲や有茎式銅鏡、わらび手刀子などが出土し、5世紀中ごろとされている。

一方、近年の調査のものでは、愛知県の兜山古墳や同じく三山2号墳などがある。兜山古墳は、円墳で内部主体は粘土構造であるが、城の谷古墳鏡に似た「六神鏡」のほかに三角縁神獸鏡や四乳文鏡、石製容器などが出土し、4世紀後半のものとされている。<sup>(註7)</sup>また、三山2号墳は、内部主体に2基の木棺を平行して埋葬している円墳で、そのうちの南棺からは、城の谷古墳出土鏡に

似た「六神鏡」や、鉄劍、鉄鎌などが出土し、5世紀前半に比定されている。

城の谷古墳出土鏡も、これら上記の古墳とはほぼ同時期頃のものといえようが、当墳からは、<sup>(註1)</sup>棺外副葬品として土師器壺が出土し、それは5世紀前半の時期に比定されるものである。以上のことから、彷彿鏡のうち「神」か「獸」の頭部のみを誇張して内区主文様とした一群の鏡類は、ほぼ5世紀初頭前後を前後する時期に流行したものと思われる。

註1. 後藤守一『漢式鏡』雄山閣 大正15年

註2. 樋口隆康『古鏡』新潮社 昭和54年

註3. 『山陰の古墳文化』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館 昭和50年

註4. 田中琢『古鏡』講談社 昭和54年 図版目録91の鏡をさす

註5. 田中琢『古鏡』至文堂 昭和56年 第124図の鏡をさす

註6. 『新発見の考古品—文化庁保管の埋蔵文化財（昭和40～50年度）』東京国立博物館 昭和52年

『岐阜市史』史料編（考古・文化財）岐阜市 昭和54年

註7. 「石器と土器・古墳と副葬品」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第13輯 昭和13年

註8. 『宗像沖の島』吉川弘文館 昭和54年

註9. 『北部九州の古代文化』明文社 昭和51年

註10. 『東海の古墳時代』名古屋市博物館 昭和51年

註11. 註10と同じ

#### ④ 副葬土師器と古墳の年代

古墳主体部箱式石棺の東側棺外にて、土師器壺1点が出土した。この壺は初葬された1号被葬者に供献されたものと思われる。わずか1点の資料であるが、本墳の年代を決める重要な手掛りとなる土器である。

副葬壺は、口径約11cm、胴径約13cmと小形で、口縁部は「く」の字状に外反し、やや扁球形の体部を有している。器壁はやや厚手で、内外面ともナデ仕上げであるが粗雑な作りである。

以上の観察から、副葬壺の時期を考えると、まず墳丘などからも須恵器等は1片も採集されておらず、それ以前のものと考えることができ、一応古式土師器の範疇に含まれるものであろう。そして、口径は胴径よりも小さくなり、しかも器壁も厚く作りも粗雑であることなどからしてそれら土師器群のうちでも最も後出のものとされよう。この副葬壺に類似したものとしては、当墳近辺ではほぼ真西8kmほど下流の八女市室岡の道添遺跡においてみられる。この遺跡<sup>(註1)</sup>は弥生時代後期から古墳時代後半にかけての集落跡であるが、古墳時代前期の17号住居跡出土の小形壺(Fig. 193 1707)に酷似している。また、距離的には遠くなるが、筑紫郡那珂川町の今光遺跡がある。この遺跡は、主として古墳時代前期と平安時代の生活遺構が営まれている<sup>(註2)</sup>

が、溝2出土の小形甕（第51図 104）や13号住居跡出土の小形九底壺（第42図 41）などに酷似している。

道添遺跡のものは、報告者の編年によるとⅢA～ⅢB期に属し、5世紀前半代に位置づけられ、また、今光遺跡のものは、報告者編年によると溝2がV期、13号住居跡がIV期に区分されともに5世紀前葉のものとされている。

以上の諸例により、城の谷古墳副葬土師器壺の時期をほぼ5世紀前半頃のものとされよう。他方、古墳の内部構造や副葬品の組み合せなどから勘案しても、当墳の築造年代を5世紀の前半としても大過ないものと考える。

註1. 竹末純一「遺物の検討」『九州総合自動車道関係埋蔵文化財調査報告』IX 福岡県教育委員会 1977

註2. 佐々木隆彦「今光遺跡・地余遺跡」東急不動産株式会社 1980

#### ⑤ 複数埋葬と被葬者の性格について

古墳主体部の箱式石棺に、遺骸が2体埋葬されていたことは何度も触れたことである。古墳の一格一体埋葬を原則とする施設に、2体あるいはそれ以上の遺骸を葬る複数埋葬の類例は比較的多く知られている。石部正志氏は、棺・槨を墳丘中に個別に埋設する葬法を「豎穴系葬法」と呼び、豎穴系の葬法をとる多葬墳のうち同一の棺内に二体以上を埋葬する方式を一棺多葬とし、全国でも100例以上を数え、中でも箱形石棺をはじめ石棺を埋葬施設とする場合に一棺多葬が多く87例を数える、という。<sup>(註1)</sup>

こうした複数埋葬は北部九州においても多く見られるところであるが、県内で管見に触れただけでも下記の25例近くが数えられる。

1. 八女市立山山12号墳 (豎穴式石室)  
(註2)
2. 久留米市祇園山第2号墳墳丘下石蓋土壙  
(註3)
3. " 七曲山第1号墳 (豎穴式石室)  
(註4)
4. " " 第2号墳1号石棺
5. " " " 2号石棺
6. 太宰府市宮ノ本6号墳 (箱式石棺)  
(註5)
7. 福岡市堂ノ上遺跡 (箱式石棺)  
(註6)
8. " 小戸1号箱式石棺  
(註7)
9. " 重留 (箱式石棺)  
(註8)
10. " 三宅雲雀ヶ丘古墳 (箱式石棺)  
(註9)
11. " 中尾古墳 (箱式石棺)  
(註10)
12. 大牟田市古城山古墳 (家形石棺)  
(註11)

13. 筑紫野市唐人塚遺跡 2 - 4 石蓋土壙墓
14. 甘木市持丸 7 号墳 (箱式石棺)  
(註12)
15. 甘木市池の上 4 号墳 (竪穴式石室)  
(註13)
16. 那珂川町炭焼 2 号墳第 1 号石棺 (箱式石棺)  
(註14)
17. " " 第 2 号石棺 ( " )  
(註15)
18. 三輪町乃木松 5 号墳 (箱式石棺)  
(註16)
19. 朝倉町志波宝満宮境内古墳 (箱式石棺)  
(註17)
20. " 下須川山田 (箱式石棺)  
(註18)
21. 濑高町蛇谷古墳 (石棺系竪穴式石室)  
(註19)
22. " 小田薬師堂山 (箱式石棺)  
(註20)
23. " 長谷  
(註21)
24. 福間町手光北 3 号墳 (石棺系竪穴式石室)  
(註22)
25. 高田町石神山古墳 (舟形石棺)  
(註23)

上記例のうち、高田町石神山古墳は人骨の出土はないが舟形石棺に 2 個の並列枕を造り出しており、複数埋葬と考えられる。

これら複数埋葬のうちのほとんどは、男女 2 体埋葬であるが、池の上 4 号墳のように女性 2 体のものや、福岡市雲雀ヶ丘例のように壮年男女に幼児を加えたものもあり、さらには古城山古墳例にみられる男女 3 体、女性 1 体の計 4 体を埋葬した特殊なものもある。

上記古城山古墳をまとめられた佐田氏は、「複数埋葬出現の要因については明確にすることはできないが、北部九州においては 5 世紀後半には一般的になってくる」と述べられている。  
(註24)  
また、日本書紀には、二人の死者を一つの棺に葬ることを阿豆那比の罪にあたるとして禁じているが、「阿豆那比考」でこれを論じた小林行雄氏は、「古墳時代の終末期ごろまでは継続して行なっていたと考え得る同棺重葬の風習も、いっぽうでは、今日われわれの知っている資料によるかぎり、前期までさかのばる実例はない」としてその初源を古墳時代の中期に求められている。しかし近年の調査により、岡山県殿山古墳群では弥生時代後期にまで遡る同棺重葬例が発見されていることも事実である。  
(註25) 城の谷古墳は古墳時代中期の 5 世紀前半のもので、県内における複数埋葬としては、そう古いものではないと考えられる。

これら、複数埋葬については合葬か追葬か、被葬者の組合せ及びその関係、更にはその時代の社会的背景など解決すべき多くの難問が残されている。筆者も県内における複数埋葬例を上記の 25 例ほど数えたが、まだ細部の検討までには至っていない。しかし、多くの類例を加えることが古代人の死者に対する思想をより明らかにしめる資料の発見につながるものと考え、更に多くの類例を加えたい。

さて、城の谷古墳をめぐる諸問題についていろいろと述べてきたが、最後に当墳に葬られた

被葬者の性格について触れてみたい。

主体部の箱式石棺には2体の遺骸が葬られ、人骨の残存状態などから追葬が行われたものと考えた。初葬の1号人骨は30代の女性、追葬の2号人骨は50代の男性と鑑定されている。こうして合葬された被葬者同士の関係は、成人男女ということで夫婦の間柄を考えるのが自然であろう。小林行雄氏は「同室または同棺の合葬には、先葬者の遺骨が占有する空間をおかさない場合と、追葬者の収容にさいして先葬者の遺骨を整理除去するばかりがある。すなわち前者は夫妻を合葬する夫婦墓的傾向がみられ、後者は血縁者を合葬する同族墓的傾向が認められる」と述べられている。<sup>(註27)</sup>当墳の場合は明らかに前者に属することから、城の谷古墳に埋葬された被葬者は、夫婦であったと言えよう。

しかし、ここで問題となるのは、埋葬の仕方である。初葬女性被葬者は、丁寧な粘土枕に安置され、副葬品も鏡や勾玉・管玉などの豊富な装身具類を伴っている。これに対し、追葬の男性被葬者は棺内には一点の副葬品も有さず、わずか棺外に鉄鉢を一点副葬するのみである。これは、明らかに女性被葬者の方が厚葬され、男性被葬者は従属性的な立場をとっていることを物語るもので、城の谷古墳は「或る特定の女性」の被葬者を「主」として築いた古墳ということができる。

女性被葬者を埋葬した古墳としては、柏原郡志免町に見られる七夕池古墳があり、5世紀前半に比定されている古墳である。この被葬者は鏡・剣・玉や琴柱形石製品を伴う高齢の女性<sup>(註28)</sup>で、「在地豪族の夫人、あるいは巫女的人物」であったと考えられている。城の谷古墳の場合、女性被葬者が主で、男性が従であることからして豪族夫人とは考えられず、或る特定の女性とは「巫女の性格の人物」が考えられよう。

註1. 石部正志「前期古墳における特殊な多葬について」『権原考古学研究所論集 創立三十五周年記念』権原考古学研究所 昭和50年

註2. 「立山山古墳群」『八女市文化財調査報告書』第10集 八女市教育委員会 1983

註3. 「祇園山第2号墳の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXIV 福岡県教育委員会 1979

註4. 「七曲山古墳群の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXVII 福岡県教育委員会 1979

註5. 「宮ノ本遺跡」太宰府町教育委員会 1980

註6. 「志賀島」金印遺跡調査団 1975

註7. この古墳についての実態は不明であるが『宮の前遺跡(A~D地点)』1971の報告書で触れている。

註8. 「有田遺跡」福岡市教育委員会 1968

註9. 「北九州古文化図鑑」第二輯 福岡県高等学校教職員組合 昭和25年

- 註10. 「箱式石棺内に於ける合葬遺跡の調査」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第7輯  
福岡県 昭和7年
- 註11. 「筑後古城山古墳」古城山古墳調査団 1972
- 註12. 「唐人塚遺跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XW 福岡県教育委員会 1977
- 註13. 「持丸古墳群」『甘木市文化財調査報告書』第1集 甘木市教育委員会 1974
- 註14. 「池の上墳墓群」『甘木市文化財調査報告書』第5集 甘木市教育委員会 1979
- 註15. 「炭焼古墳群」『福岡県文化財調査報告書』第37集 福岡県教育委員会 1968
- 註16. 「乃木松古墳群」『三輪町文化財調査報告書』第3集 三輪町教育委員会 1977
- 註17. 註10に同じ
- 註18. 「埋もれていた朝倉文化」福岡県立朝倉高等学校史学部 昭和44年
- 註19. 「山門郡瀬高町蛇谷古墳調査概報」『筑後考古』第3号 筑後考古学研究会 昭和51年
- 註20. 註9に同じ
- 註21. 村山健治『女山長谷古墳群』(孔版) 1962
- 註22. 「手光古墳群」I『福間町文化財調査報告書』第1集 福間町教育委員会 1981
- 註23. 「上楠田の石神山遺跡」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第一輯 福岡県 大正14年
- 註24. 註10に同じ
- 註25. 小林行雄「阿豆那比考」『古墳文化論考』平凡社 昭和51年
- 註26. 「殿山遺跡・殿山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』47 岡山県教育委員会 1982
- 註27. 「岡解考古学辞典」創元新社 昭和34年
- 註28. 「七夕池遺跡群」『志免町文化財調査報告書』第1集 志免町教育委員会 1974

## 2 城の谷経塚の調査

石棺発見以前の段階で、石棺の西側に近接して経筒が発見されたと云うから、石棺のレベルより上位に、しかも古墳々丘を利用した経塚が造営されていたものと考えられる。経筒は既に取り上げられており、経塚そのものの削平され、その実態を知ることは不可能であったが、工事関係者の言によれば「経筒の回りには木炭が詰めてあり、上部に川原石の栗石數十個が蓋するかのように積み重ねられていた」とのことである。恐らく素掘りの壙に経筒を置き、回りに木炭を充填し、栗石を積み重ねて蓋とした経塚のようである。他に副葬品は発見されなかったようである。

遺物は銅製経筒1本と、その内から紙本経残欠が出土している。(口絵2、PL.8-1、Fig.11)。

経筒は、錫銅製経筒である。底板は欠失している。細身の経筒で底部に段がつく以外節等はない。筒身は高22.6cm、口径4.9cm、底径5.8cm、底部の段は高0.8cmである。底部の段の内側には抉りが廻り、ここに底板を叩き込むのである。筒身の厚さは一定ではなく、1~2.5mmである。また、特徴的なのは、筒身外面に錫型の合せ目のズレによる線が相対して二ヶ所に縱に走っている。内面には見られないことから内には筒状の、外は半切の錫型を使用したことが判る。口縁部の蓋を受ける部分は蓋の径に合わせる為に若干削られている。

蓋は円形の被せ蓋で、蓋を受ける部分の内径4.95cm、屋根の外径7.15cm、頂部には高1.5cmの相輪状撮みがあるが、先端が欠失していて全体は不明である。輪転で回転させて削ったのであろう螺旋状に段を廻らせて相輪としている。蓋の総高3.33cmである。蓋上面には木炭が接着している。

蓋を被せた経筒の総高は25.5cmで、蓋身ともに錫錆に被われている。

紙本経残欠は、筒身下部に付着して若干が残っていた。残存状態から巻子本であり、墨書であることが判る。経輪等は今残存しない。経筒の底板が欠失していることか

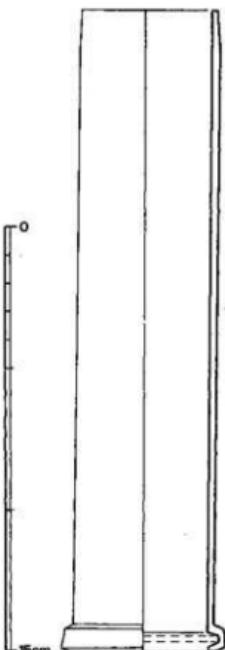


Fig. 11 経筒実測図 (1/2)

ら、或いは取り上げ時に紛失したのかも知れない。

以上が経塚及び遺物の概要である。

当該経筒は細身であること、筒身に縦に走る鋲型による線があることが特徴である。この種の経筒は求菩提山経塚に類例を見ることができ、豊前地方で製作されたことは明白である。この種の経筒は、求菩提山中のみに見られる形式であり、かつ、同山胎蔵窟から発見された銅板法華経を供養した関係者にまつわる経筒の形式である。(PL. 8-2・3・4, Fig. 12)。  
(註1)

求菩提山経塚の類例から、当該城の谷経塚造営年代は康治元(1142)年を前後する時期と考えられる。

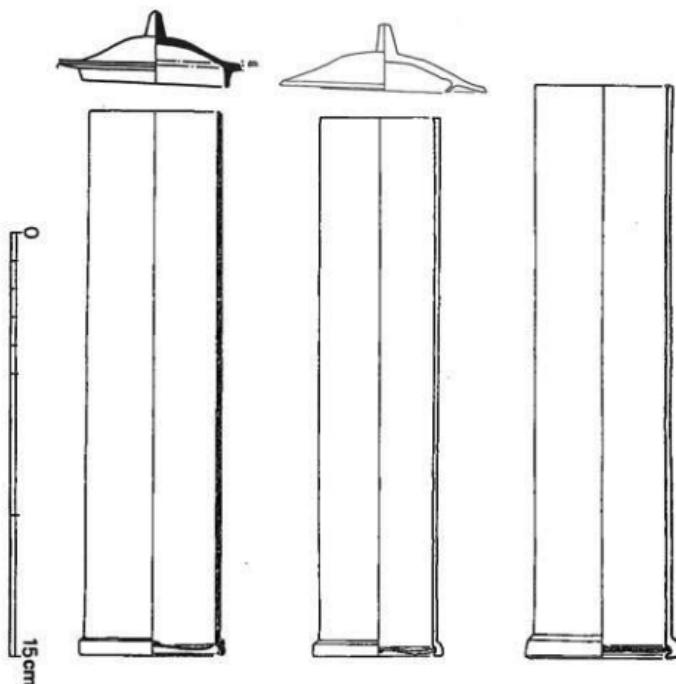


Fig. 12 求菩提山経塚出土経筒  
(左から行賀、陸堅、嚴尊銘経筒)

なお、一步想像を逞しくすると、求菩提山銅板法華経供養に関係する人物の造営による経塚であったかも知れない。何れにせよ、求菩提山修験の宗教活動が当八女地方に及んでいた可能性を知ることができる経塚である。

註1. 豊前市教育委員会「求菩提山経塚」『豊前市文化財調査報告書』第1集 1976

" " 「求菩提山」『豊前市文化財調査報告書』第2集 1977

" " 「求菩提山」『豊前市文化財調査報告書』第3集 1978

註2. 註1の調査によって、この種の経筒8本が発見され、三名の造営者が知られる。その記年銘は次のとおりである。

。上宮地区第8区経塚

妙法蓮華経一部

保延六年十月廿二日

願主僧隆鑑

。上宮地区第19区

如法妙法蓮華経四部之内一部

康治二年十一月廿八日供養畢

願主僧嚴尊

。護摩場地区

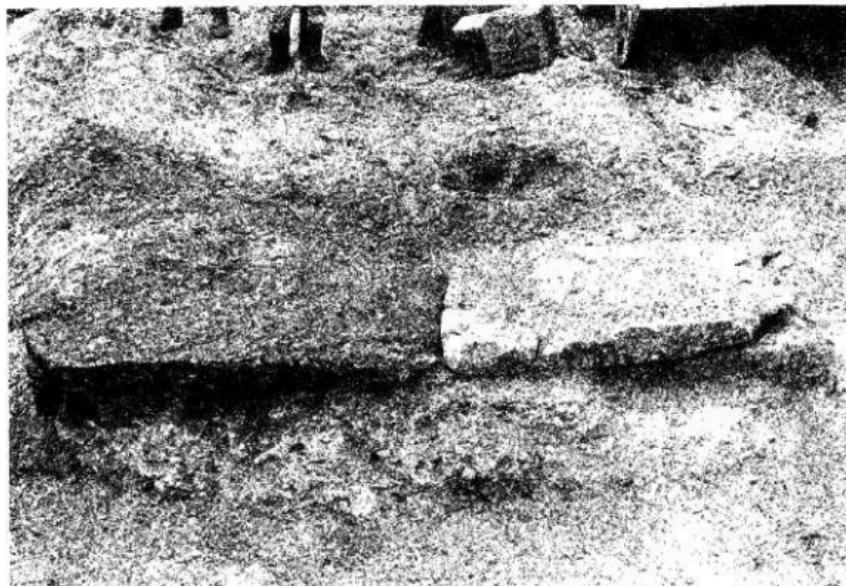
妙法蓮華経一部 僧行賀

上記三名の僧は、銅板法華経供養に関係する人物である。

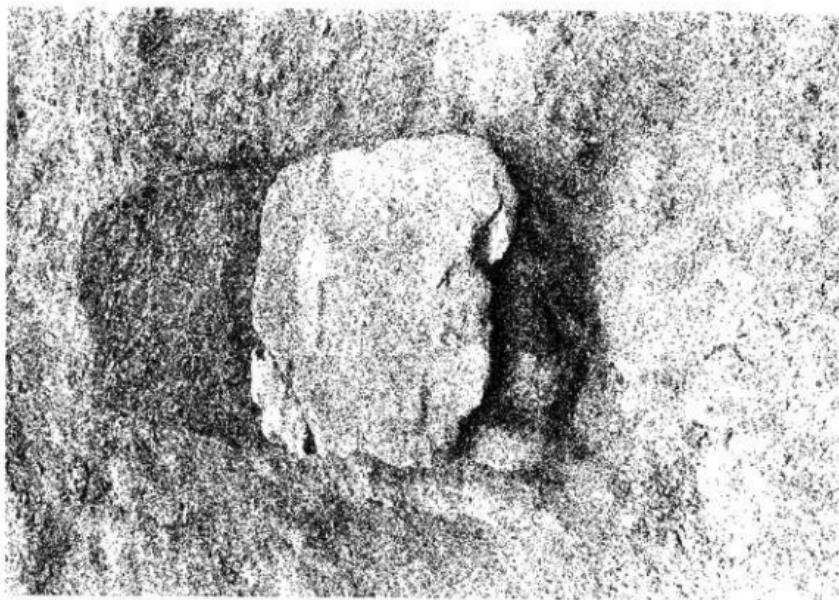
# **PLATES**



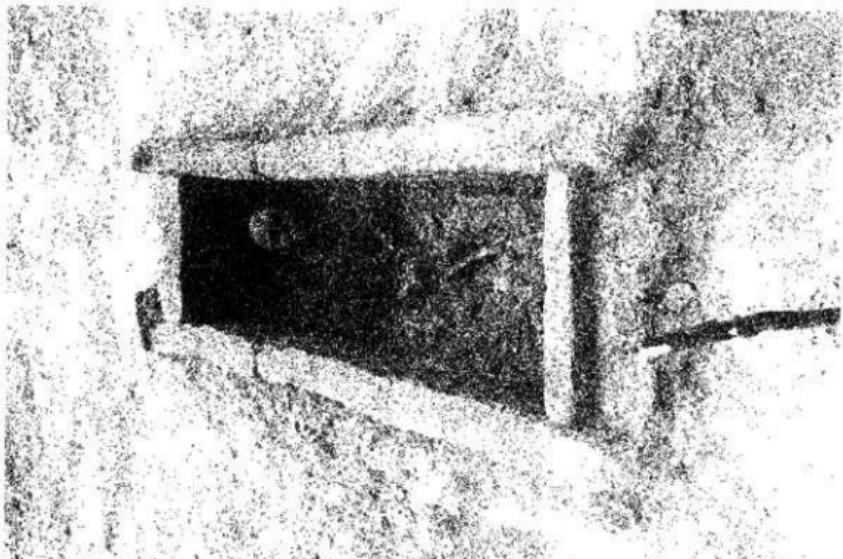
1. 古墳遠景（南から）



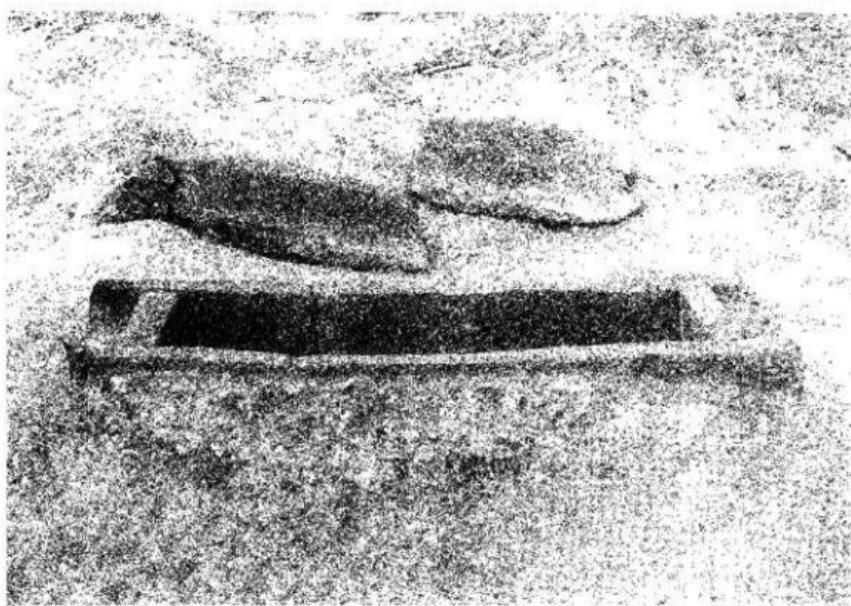
2. 石棺露出状態（南から）



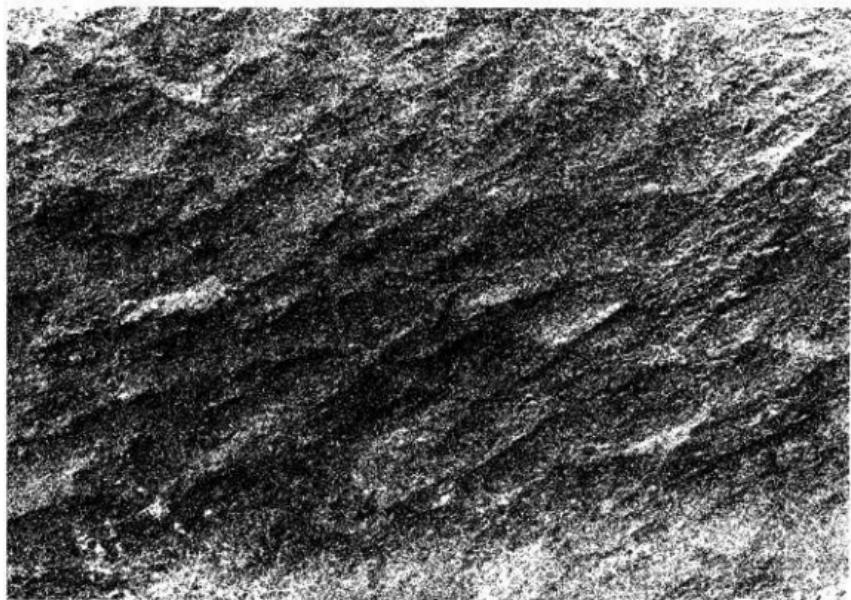
1. 石棺蓋石（東から）



2. 石室内部 2号人骨（東から）



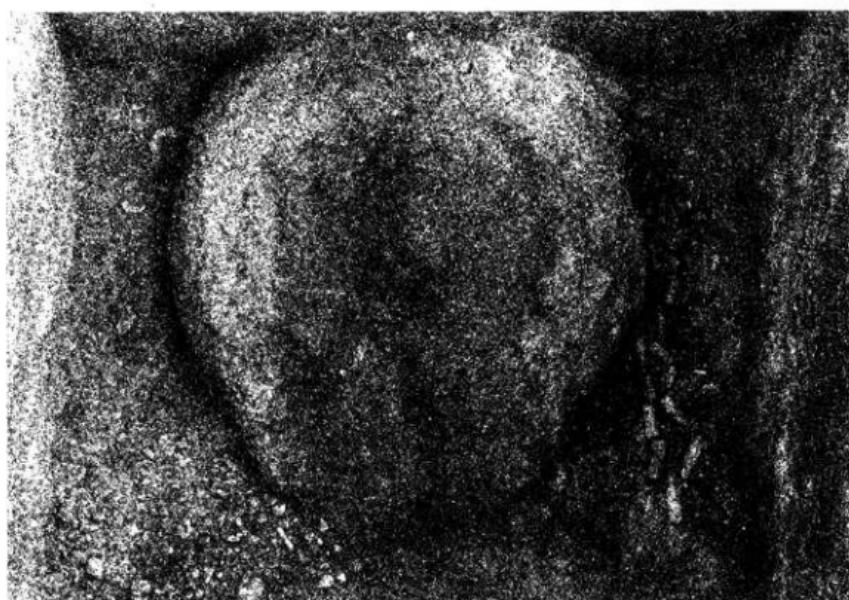
1. 石棺蓋石除去後（南から）



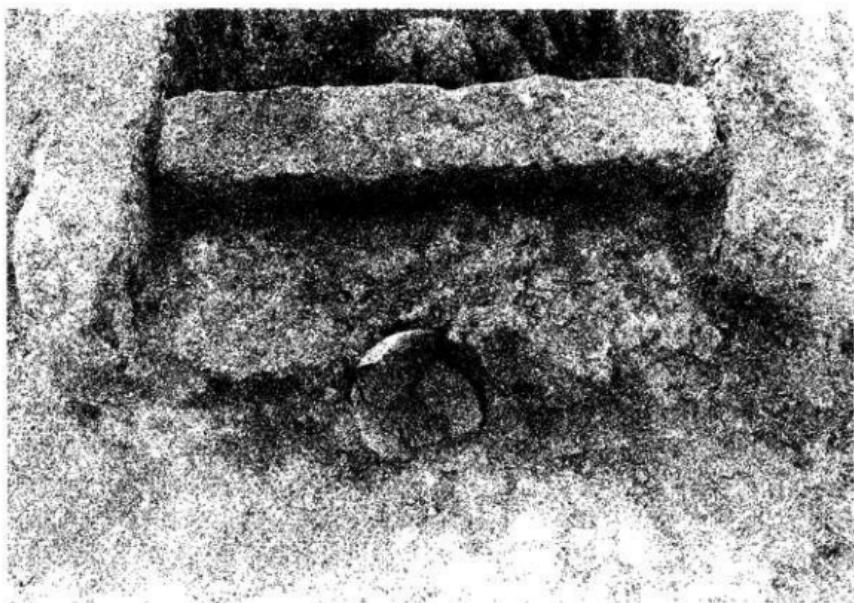
2. 石棺側板工具痕（南から）



1. I号人骨、鏡出土状態（西から）



2. 粘土枕、装身具出土状態（西から）



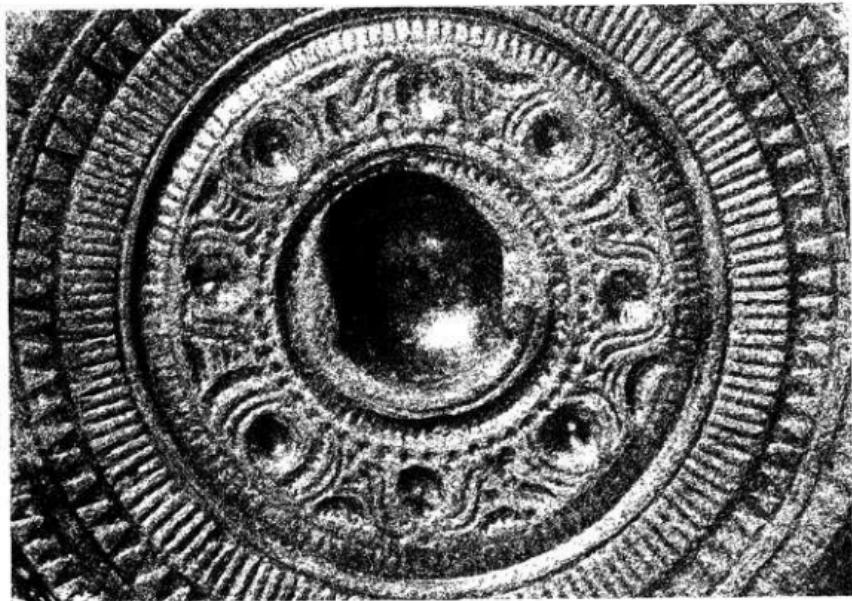
1. 棺外副葬土師器壺出土状態（東から）



2. 棺外副葬鉄鉢出土状態（西から）



1. 变形神人境



2. 变形神人镜（扩大）



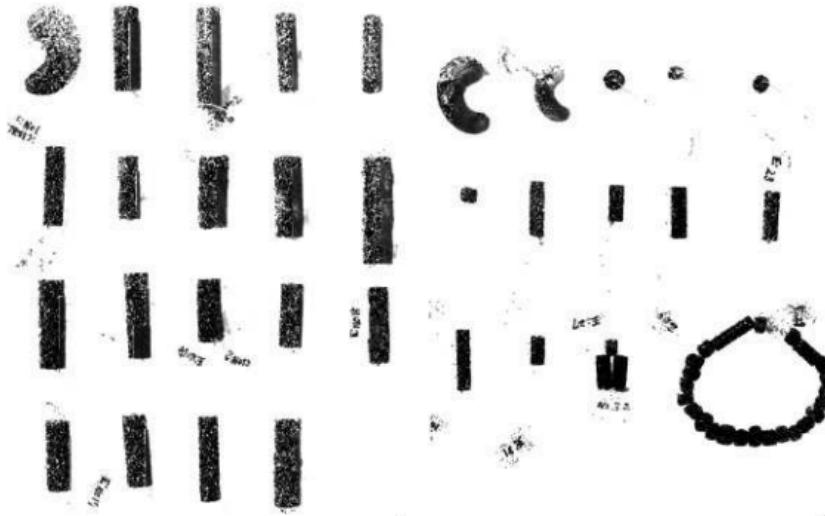
1



2



3



4

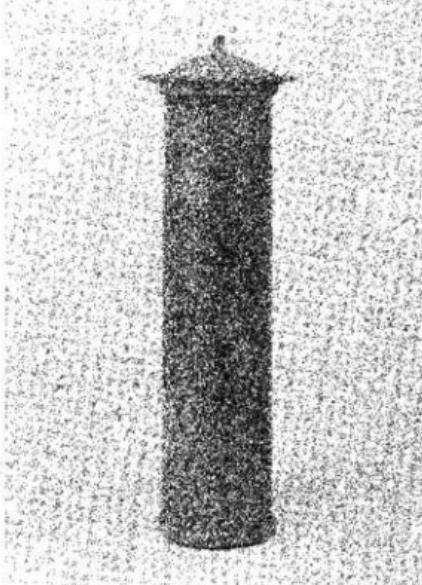


5

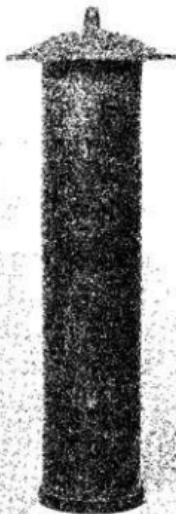
古墳出土遺物（1 土師器壺、2 鉄鉗、3 鉄刀子、4 頭部左脇出土玉類、5 頭部右脇出土玉類）



1. 城の谷経塚出土経筒



2. 求菩提山経塚出土経筒（行賀銘）



3. 求菩提山経塚出土経筒（隆鑒銘）



4. 求菩提山経塚出土経筒（巖尊銘）

八女市文化財調査報告書 第9集

## 城の谷遺跡

昭和58年4月30日

発行 八女市教育委員会  
八女市大字本町647番地

印刷 青柳工業株式会社  
福岡市中央区渡辺通2丁目9-31